

『金峰山秘密伝』に見る十三世紀末の天川弁才天 ―役行者伝承と宇賀弁才天信仰をめぐって―

藪 元 晶

はじめに

奈良県吉野郡天川村の天河大弁財天社は、明治以前は琵琶山白飯寺と号していた。延宝九年（一六八二）開版の『大和名所記⁽¹⁾』には、第十一卷芳野郡「天川白飯寺」の項に次のように記されている。

琵琶山白飯寺ハ役行者大峯の道をひらきなんとて先此山にして靈験をいのり給ひしに山に冷水湧ながれ神靈円光をかゝやかす廟には琵琶の響ありて人心の迷雲を払ひしより琵琶山と号せり其後弘法大師の千日のをこなひには弁才天女現じ給ひしかバその尊像をきざみ神霊をおさめられき今の本尊是なり弘法大師伽藍造営より凡八百歳靈験日々に威を増し利益夜々に徳をぞあらわしける
帳 勸進

役行者が大峯の道を開こうとした時に、先ずこの山で靈験を祈ったところ、山に冷水が湧き流れ神霊が円光を輝かせた。廟には琵琶の音が鳴り響いて人々の心の迷いを払ったので琵琶山と号したという。その後、弘法大師が千日の行をおこなった際に弁才天女が現れ

たので、その尊像を刻んで神霊をこめられた。今の本尊がこれである。弘法大師が伽藍を造営されてからおよそ八百年になるが、今も靈験あらたかであるという。

ここでは、役行者は大峯の道を開かんとして祈り奇瑞を得たとい、弘法大師はここで千日の行をおこない、弁才天の像を刻んで伽藍を造営したということである。この伝承では、天川弁才天は弘法大師と最も深く結びついて語られていることになる。それに比べると、役行者はそれよりも早くに訪れたとはいうものの、奇瑞を得ただけにとどまっている。

それでも、役行者が訪れたという伝承が語られていることから、天川弁才天と大峰修験との関わりが想像されるのは当然のことである。それ故、多くの研究者も、修験との関係で天川を論じている。⁽²⁾

この天川弁才天について、まとまった記録として最も古いものが『金峰山秘密伝⁽³⁾』である。十三世紀末の撰修と考えられており、その当時の天川弁才天の信仰を知る上で大変貴重な史料となっている。これをもとに天川弁才天を論じられたのが、宮家準先生と鈴木昭英先生である。

宮家先生は、『大峯修験道の研究』⁽⁴⁾の中で、「熊野川の上流に位置する天川弁才天は、鎌倉時代末頃までは天川郷一円を旦那場とした熊野先達の影響下にあったようである。そのこともあつてか、当時の伝承をあつめた『金峯山秘密伝』では、大峰山における金剛界・胎蔵界冥合の霊地である大峰山中の神仙（深仙）の下、釈迦ヶ岳の麓の社壇が弁才天と号する天川神であるとしている。深仙や釈迦ヶ岳は熊野から峰入する本山派修験の奥院ともいえる霊地であるが、天川弁才天は、その里宮ともいえる位置を与えられているのである。

（中略）ところで本書には、こうした縁起の他に、吉野天河の秘法「大弁才功德天法」（吉野熊野宮法）をあげている。この修法では金峰山上の宮殿中の三宝宝珠が弁才天に变じ、さらにその周囲を大黒天、四天王、熊野権現、吉野蔵王が圍繞するとの道場観がなされ、最後に秘印として興福神の印が結ばれている。これを見ると弁才天の周囲に熊野・吉野の神格、小笹の大黒天、深仙の四天王を配し、儀軌の上でも、天川弁才天に大峰山全体の奥院ともいえる位置を与えている。また、道場観を大峰山から始め、最後に秘印として興福神の印を用いているのは、当時金峰山が興福寺の支配下にあり、天川弁才天もその影響下にあったことを示している。」と述べられている。つまり、『金峰山秘密伝』が書かれた十三世紀末の天川弁才天は、熊野の先達の影響をうけるとともに興福寺の影響下にあったとされ、周囲と深い関係にあったと論じられている。

ただし、ここであげられた「興福神の印」については、「興福神の印」ではないかと思われる。その項に「依『此印言』故一切財宝随」

願速成就」と財宝が願い通りになることが書かれているので、福を与える印と解する方がよいようである。⁽⁵⁾ よって、興福寺の影響力については不明であるが、吉野・大峯・熊野との関係は、確かに考えなければならぬ問題である。

一方、鈴木先生は、『修験教団の形成と展開』⁽⁶⁾の中で、「大峯山に両部曼荼羅を配当したことで、修験道界で重視されるようになったのは天川坪ノ内弁才天社である。天川弁才天社は熊野と吉野の中間に位置することから「吉野熊野宮」と称され、両部冥合の悉地とされ、大峯入峰の修験者は必ずこの社にぬかずき、奉幣する責務を負わされたのである。南北朝の初めには成立していた『金峯山秘密伝』に、そのことが窺われる。熊野と金峯の中間、深仙の下、釈迦ヶ岳の麓に一社壇があつて、これを天川の神と名づけ、弁才天と号すること、その大弁才功德天女は蘇悉地の妙体、胎金不二の像で、信ずる者は寿命を万歳に保ち、帰する者は七福を百世に持ち、祈誓願望速かに成就すること、その社は熊野・吉野両宮の中間にあるから吉野熊野宮と称するもので、弘法大師がこの社の額に吉野宮熊野宮と筆で書かれたことを述べ、さらにこの弁才天を竹生島弁才天・江の島弁才天・厳島弁才天とともに日本の四弁天に挙げ、そのなかで天川弁才天を最初の本源のものとしている。天川弁才天が当時修験道界でいかなる位置づけがなされていたか、いかに重視されていたかが知られる。」と述べられている。

以上のように、鈴木先生は、天川弁才天が修験と密接に関わっていたと論じられている。ただし、述べられているような、大峯入峰

の修験者がこの社に奉幣していたということが、十三世紀末に実態としてあったのかについては定かではないようである。⁽⁷⁾

本論では、両先生の論を念頭に置きながら、『金峰山秘密伝』の記事を少し別の角度からながめることによって、その当時の天川弁才天の実態を究明していきたい。

一、天川弁才天と役行者伝承

(1) 『金峰山秘密伝』における役行者伝承と天川弁才天

役行者が金峰山と関わる話は、早く『日本霊異記』に出てくるが、⁽⁸⁾そこでは役行者が直接金峰山で活動するような話にはなっていない。『今昔物語集』⁽⁹⁾巻第十一「役の優婆塞、呪を誦持して鬼神をつかひたる語 第三」には、次のように記されている。

しかるに、金峯山の藏王菩薩はこの優婆塞の行じ出したてまつ

りたまへるなり。されば常に、葛木の山と金峯の山とに通ひてぞおはしける。

役行者が金峰山において藏王菩薩を行じ出したと語られるようになってくる。このことは、役行者を崇拝し始祖とする修験集団が、この時期金峯山で活動していたことを物語っているものと思われる。十二世紀前半のことである。

それでは、十三世紀末の『金峰山秘密伝』においては、役行者はどのように語られているのであろうか。役行者伝承とともに天川弁才天の記述についても合わせて見ていきたい。次の表は、『金峰山秘密伝』の冒頭にあげられている目次である。それらの内容から、金峰山（大峰山）関係・天川弁才天関係・熊野関係・金剛山関係の四つに分類した。それと、各項目の中で、役行者の記事があるものについては、その伝承の概略を示すとともに、留意すべきことを括弧を付して記した。

【『金峰山秘密伝』の中の役行者伝承】

目次	記事の分類	役行者の伝承ほか
上		
卷 慈元序		
金剛藏王本地垂迹		役行者が大峰において祈ると、釈迦・観音・弥勒の後藏王権現が涌出する。
金峰山大峰		(天川の記事あり)
金剛藏王名号		
金剛藏王尊像		
種子	金峰山関係	

中 卷																										
役行者本地供次第	牛頭天王本地供	金精大明神本地供	八大金剛童子印信	金剛藏王行法次第	八大金剛童子	金剛藏王名号	金剛藏王尊勝仏頂	金剛藏王最勝秘密	十二所権現本地垂迹	熊野権現本地垂迹	尊像	本誓琵琶	天河	本地	天河弁才天	三十八所本地垂迹	若宮明神本地垂迹	子守明神本地垂迹	若宮本地垂迹	鎮守勝手子守等神体	三昧耶形					
					金峰山関係					熊野関係			天川弁才天関係													
役行者の姿を観想する修法。					役行者が蔵王の宝窟を開いて生身の姿を拝した。（弘法大師も修行し、聖宝が再興した。）					役行者が金剛山・箕面の後に大峰に入ったこと。三尊と蔵王権現の涌出。					(弘法大師が当社の額を書いた)					役行者が勧請したともいう。						

下		卷
金剛藏王行法次第		
金剛藏王法		
金剛藏王行法次第	金峰山関係	
勝手大明神本地供次第		
子守明神本地供次第		
大弁才功德天法	天川弁才天関係	
此尊秘印言		(目次・新作としてはあがっていないが、本文はあるもの)
金剛山縁起	金剛山関係	役行者が金剛山の宝座に座って大心を発したこと
当山諸神本地異説事	金峰山関係	
十五童子		
八大童子印明		(目次・新作としてはあがっておらず、本文が欠落しているもの)

以上のような構成となっている。金峰山についての記事が多数を占めるのは当然のことであるが、天川弁才天についても少なからず紙面をさいっており、熊野と金剛山については一、二の項目にとどまっている。

そして、役行者の記事について見ると、金峯山においては、巻上の「金剛藏王本地垂迹」と「三十八所本地垂迹事」、巻中の「金剛藏王最勝秘密」と「金剛藏王名号」と「役行者本地供次第」に記載されている。金峰山以外では、金剛山の縁起として、役行者の宝座のことが書かれている。ところが、不思議なことに、天川と熊野においては、役行者のことは全く一言も語られていないのである。

金峰山において数種の役行者伝承が語られていることは、この当時の金峰山では役行者を始祖とする修験集団が活発に活動していたことを示すものと考えてよいであろう。そういう状況の中で、天川が金峰山の影響下にあったとするならば、天川においても役行者伝承が語られていてもおかしくはないはずである。にも関わらず、全く役行者の話は登場してこない。このことを一体どのように理解すればよいのだろうか。もしこれが、その当時の実態をそのままに表しているとするならば、天川にも熊野にも役行者を始祖とする修験者集団がまだ入っていないかったか、あるいは影響力を及ぼすまでには至っていなかったということになる。果たしてどうなのである

うか。ここでは、天川だけに問題をしばって考えることにしたい。

『金峰山秘密伝』だけで判断することは難しいので、その後の史料にはなるが、天川弁才天と関係して語られている他の役行者伝承を見ることで考えていきたい。

(2) 天川弁才天に関わる役行者伝承

『英俊御聞書』⁽¹⁰⁾には、多門院英俊が天文四年（一五五四）に参詣した天川のこと記されている。それには、

天川開山、役行者 山号、琵琶山、寺号、白飯寺、マエ立、天女、高野大清僧都令作之、仏士、弘法入定以後假^テ化^シ、作之給、十五童子、彼所、竜王、作、申伝、云々、七種、利生、一、舍利感得、二、御殿、内、鈴、音、三、（同）ヒワノ音、四、異香、キク、五、（御殿、前）御塩指^{ミシホサス}功名^{ミシホサス}朱柱^{シホサス}悉クヌレ、六、白狐、見、七、白蛇、見、以上とあり、「はじめに」で紹介した『大和名所記』と同様の伝承が、遅くとも十六世紀中頃には成立していたことを知ることができる。

これよりも古いものでは、『溪嵐拾葉集』⁽¹¹⁾巻第三十七「弁財天縁起末」の冒頭に「紀州天河縁起事」がある。この部分は、文保二年（一二一八）に書かれたものであるので、十四世紀初頭の記事である。

相伝云。役行者於「紀州天川」此法成就。弘法大師即役行者再誕

也。何、大師同於「此天川」此法成就。又一守長者同於「江州

竹生島」此法成就セリ。的長者須達再誕也。即伝教大師、檀那也。

一守長者、檀毘梨、再誕也。即弘法大師、檀那也。⁽¹²⁾

役行者が天川においてこの法を成就したという。弘法大師は役行

者の再誕であつて、弘法大師もまた天川においてこの法を成就したという。この法というのがはつきりとは述べられていないが、弁才天に関わる修法であることには間違いないであろう。ここで注目されるのは、役行者と弘法大師が弁才天の法を成就したとは述べてはいるが、役行者がここを開いたとまでは書かれていないことである。

このほかには、『大乘院寺社雑事記』寛正二年（一四六一）六月七日の条に、尋尊が天川を参詣した際の御宝物の記事があり、その中に「エンノ行者ノ金ツエ」というのがある。その伝承までは記されていないのでくわしくはわからないが、役行者に由来する金の杖が納められていたようである。

『大和名所記』を含めて、以上四つの史料を紹介したが、これらの史料はいずれもその当時天川弁才天において語られていた伝承ではないかと思われる。というのは、尋尊や英俊は天川参詣の際に見聞きしたものを書き留めているし、『大和名所記』や『溪嵐拾葉集』にしても天川からの伝聞をもとにして書き記したものとみられるからである。『大和名所記』の記事の最後には「勸進帳」とあるので、天川弁才天の勸進帳をもとに記したものかと思われる。そうすると、まさに天川弁才天側の伝承といえる。また、『溪嵐拾葉集』の記事も、「紀州天河縁起事」という項目であるので、その当時天川において語られていた縁起をもとにしたものであることは間違いないであろう。いずれも書き手は天川の外部の人々ではあるが、内容は天川弁才天においてそれぞれの時代に語られていたものと考えられる。つまり、役行者と天川弁才天の関係を説くこれらの伝承は、天川弁才

天側から発信されていた伝承であるといえるであろう。

それでは、役行者を中心にして書かれた役行者の伝記類において、天川弁財天はどのように語られているのであろうか。それら伝記類をながめてみたところ、管見ではあるが、意外なことに、以下の三つの史料しかそれに該当するものはなさそうである。以下、年代順に紹介したい。

室町時代初期の成立とされている『修験指南抄』⁽¹³⁾には、次のようにある。

廿六弥山弁財天出現事

自^三執山^{瑞光指至^三弥山^{飛來給則}}

爰役行者抖擻刻、大禪師巖屋日輪光指、行者恠^三之^{至^三彼処^三}見給、光明赫奕微妙、床在^三女体之尊容^{御坐、其時行者曰、誰人哉、答曰、我是大日、顕化、日輪之变身、大弁財天女也、仏法此山^三移故、仏道修行、衆生^三為^三利益^三現^{爰云云、行者斜成^三歡喜^三}、曰、善哉々々、女形如何、弁財天女答曰、我是大日分身日輪也、变身也、為^三守護^{出現云云、此所不^三応^三天女^三、当^三此北^三}有^三大山^三、頂上^三有^三広池^三、湛^三八功德水^三、不^三異^三須弥山^三、遠可^三彼地移給^{云云、此山移仏道行人守清、}}

廿七天河弁財天者、其後為^三万民利益^三麓^{勸請、其外四弁財天皆以弥山天女之分身也、}

弥山弁財天の出現の話。役行者が抖擻をしていた時、大禪師の岩屋に日輪の光が差したという。行者は怪しく思いそこへ行くと、大弁財天女であった。仏道修行の衆生の利益のために現れたという。行者は、この北に大きな山があり頂上に池があるので、須弥山に異

ならないとして、そこへ移り給えと述べた。天河弁財天は、その後、万民利益のために弥山弁財天が麓に勧請されたものである。その他の四弁財天も皆弥山の弁財天の分身であるという。

次は、元禄四年（一六九一）頃成立の『峰中秘伝』⁽¹⁴⁾である。

涌出ノ嶽ト申ハ蔵王弁財天地蔵ノ三尊自然ニ涌出シテ顕レ出玉フ依テ涌出ノ嶽トハ申ス也。（中略）此ノ嶽ヲ三七日祈リ玉フ也。一七日目ニハ天ノ河ノ弁財天出玉フ。実ニ容顔美麗ニテ三十二相ノ形ヲ顯シ出給ニ依テ。其姿ニテハ此ノ山ノ主シハ難成トテ天ノ河ヘ下シ申ニ依テ。天ノ河弁財天ト成リ給フ。

役行者が涌出の嶽に登って祈ったところ、一七日目に天河弁財天が現れたが、美麗な姿ではこの山の主にはなりがたいとして天河へ下したところ、天河弁財天となったという。

最後は、宝暦年間（一七五〇年代）成立の『役君微業録』⁽¹⁵⁾である。蔵王権現の涌出に先立って、

弁財天女降臨。公曰。有^{トモ}威亦女身也。未^レ也。天女避^三于天^河。

在大峰。

と、初めに弁財天女が現れたが、女身であるとして天河に避けたという。また、それとは別に、

公宿^三于天河^一。見^前。天女出彈^三琵琶^一。爾來稱^三其山^一曰^三琵琶^一。

と、役行者が天川に宿した際に、天女が現われて琵琶を弾じたので、それ以来その山を琵琶と称したという話を載せている。

以上紹介したように、数多くある役行者の伝記類の中で、役行者

が天川弁才天と関わる話を載せているのはわずかにこれだけのものである。⁽¹⁶⁾ 内容を見ると、役行者が弥山(『修驗指南抄』)あるいは天川(『役君徴業録』)において弁才天の出現を見たという話と、蔵王権現湧出の際に天川弁才天が出現した(『峰中秘伝』・『役君徴業録』)という話である。⁽¹⁷⁾ 『修驗指南抄』の成立は室町初期と推定されているが、『峰中秘伝』と『役君徴業録』は江戸時代になってからの書物である。これらの伝承の成立が、さほど古くまでさかのぼらないものであることがわかる。

以上のように、伝記類に記載されることがきわめて少ないことや、伝記類に記載されるようになったのが比較的事後なことであることから、伝記類の作者にとって、役行者が天川弁才天に関わったという話は、さほど重要なものとは意識されていなかったことを示している。

(3) 蔵王権現(菩薩)湧出譚と天川弁才天

先の話で、役行者が蔵王権現を湧出させた際に天川弁才天が現れたとあったが、その舞台となった蔵王権現の湧出譚そのものは、古くから見られる。先にあげた『今昔物語集』巻第十一「役えの優婆塞うばざう、呪じゆを誦持じゆぢして鬼神をつかひたる語 第三」がそれであるので、十二世紀前半にはすでに成立していたものと考えられる。

ここでは、役行者が行じ出したというだけで、それ以上のことは書かれていない。それが、時代が下ると、初めは他の像が現れたが柔和であるなどの理由によって不可としたという話が付け加えられるようになる。

その変容の様子を確かめたのが、次の表「役行者の蔵王権現湧出譚と天川弁才天」である。

【表…役行者の蔵王権現湧出譚と天川弁才天】

出典	時期	内容
今昔物語集	十二世紀前半	金峯山の蔵王菩薩を役行者が行じ出した。
私聚百因縁集 ⁽¹⁸⁾	正嘉元年 (一一五七)	(亦説云) 初めに釈迦 しやくか の像 がう が現れる。濁世には不可として、さらに祈請すると蔵王が現れた。
沙石集 ⁽¹⁹⁾	弘安六年	初めに釈迦 しやくか の像 がう で現じたが、不可とする。次に弥勒 みろく の形 がう で現じたが、これも不可とした。そして、蔵王

峰中秘伝	役君形生記 ⁽²⁵⁾	役行者本記 ⁽²⁴⁾	両峰問答秘鈔 ⁽²³⁾	塵添塩囊抄 ⁽²²⁾	三国伝記 ⁽²¹⁾	太平記 ⁽²⁰⁾	金峰山秘密伝	
元禄四年頃 (一六九一)	天和四年 (一六八四)	室町末カ	室町末	天文元年 (一五三二)	応永一四年 (一四〇七)	建徳二年頃 (一二七〇)	十三世紀末	(一二八三)
（涌出の嶽）一七日目、天河弁財天が現れたが、不可として天河へ下した。二七日目、地藏菩薩が現れたが、不可として吉野河へ流し河上の地藏となる。三七日目、大日・釈迦・弥陀の三尊一体にして大荒	蔵王権現は過去は釈迦、当来は弥勒、「迦葉子現行」者「契蔵王菩薩大願」。 金峰鎮護の霊神が弥勒、千手観音、釈迦の順に現れたが、いずれも不可としたところ、蔵王権現が踊り でたという。	広国押武金日尊が小身を現したので、七日間捨身苦修すると蔵王権現として現れた。	柔和忍辱の童子が現れたので、不可として追い帰した。その後、忿怒の蔵王が現れた。	金剛蔵王は初め柔和な地藏の姿で現れた。それでは不可とし、伯耆大山へ飛びかえらせた。その後、忿怒の姿で湧出した。	神が釈迦像、弥勒像の順で現れたが、いずれも不可としたところ、次に蔵王権現が現れた。	柔和な地藏が現れたので、不可とすると、伯耆大山へ飛び去った。その後蔵王権現が現れた。	初めに釈迦、次に観音、次に弥勒が現れたが不可とする。降魔の身を願うと金剛蔵王が現れた。	権現が恐ろしい形で現じた。

役君徴業録	宝暦年間 (一七五〇)年代	神のように蔵王権現が現れた。 初め <u>弁財天女が現れたが天河に避けた</u> 。次に <u>地藏(弥勒・観音ともいう)</u> が現れたが芳野川上(伯耆大山ともいう)に避けた。その後金剛蔵王が湧出した。蔵王は <u>釈迦・観音・弥勒の合体</u> である。 役行者が天河に宿した時、天女が現れて琵琶を弾じた。以来、その山を琵琶という。
-------	------------------	---

この表を見ると、蔵王権現の涌出に先立って出現したという像は、釈迦・観音・弥勒の三尊であったり地藏であったりと様々である。そのような中に、元禄四年(一六九一)頃成立の『峰中秘伝』になつて、ようやく天川弁才天が登場することになる。

このように、蔵王権現湧出譚は古くからあるにも関わらず、その中に天川弁才天が登場するようになるのは、史料の上では江戸時代のことである。このことは、この話の中での役行者と天川弁才天とのつながりがいかに後に成立したものであるかを示している。

さらに、その登場について見ると、否定された形であることが問題である。天川弁才天は、美麗であるとの理由で「下され」、河上の地藏菩薩は、柔和忍辱であるとの理由で「流され」ている。つまり、金峰山の鎮守としてはふさわしくないという意味で登場しているの

である。これは、役行者との深い関係を説くための話では決してなく、同じ地域で信仰を集める天川弁才天や河上の地藏に比して、蔵王権現がはるかに優れたものであることを説くために語られたものではないかと考えられる。

(4) 『役行者本記』に見える役行者の修行地と天川

さらに興味深いのは、室町時代末期頃の作と推定されている『役行者本記』に、天川の名前が出てこないことである。『役行者本記』は、役行者の出生から六十八歳で箕面に隠れるまでを、年齢をあげながら詳しくその一生の行状を記しており、そこには日本各地の山で修行をしたことが記されている。非常に多くの修行の山が記されているが、不思議なことに、その中に天川の名前は全く一度もあがっていないのである。それを表によって確認したい。

【表・『役行者本記』における役行者の修行地】

年齢	活動場所および内容
小角奇特分	

出生	大和国葛城上郡茅原郷矢箱村加茂氏の家。
一三歳	毎夜葛城嶺に登る。
一七歳	出家する。雲に乗り、刀利天上に登り竜宮仙冥府を遊化する。
二五歳	箕面滝に行き、竜樹菩薩に極大甚深の印明を授与される。
三五歳	初めて大峰に登り、剣之嶽に至る。七生を知る。
四七歳	大峰に登り、深山に住む。一千の石塔を建てる。
五一歳	吉野を発し、一日夜に八菅山に行き、五七日薬師仏の秘法を修し、一日夜百体の薬師・百体の地藏・百体の不動の石像を彫り、一日夜に吉野に帰った。
五五歳	定に入り、金色世界に到り文殊に会う。三身寿量無辺経を付嘱され、大峰の経嶽に封ず。
五七歳	羽黒に行き、大日等を彫る。五十余日いて、一日に吉野に帰る。
六六歳	伊豆大島に流される。この三年、夜は天木・走湯・箱根・雨降・日向・八菅・江島・日金・富士山等へ通う。
六八歳	赦免され帰洛し、国師となる。
三八歳	山上に登り苦修して、蔵王権現を拝す。
六二歳	葛城山において一言主を呪縛する。
三九歳	伊駒嶽に登り苦修する。二鬼が来て従う。前後の鬼を金峯の奥に住まわせる。
十月、大峰にあり雪を超えて深禅に至る。八大金剛童子の集会があり、竜樹菩薩が現れ、役行者に秘密灌頂を授ける。	
小角経歴分	
三七歳	出羽の羽黒山・月山・湯殿・金峰・鳥海山、奥州の秀峰を経歴する。
三八歳	上野の赤城山。 下野 二荒山。 奥後 伊夜彦山。立山。 加賀 白山。越智山。 近江 日枝山。愛宕山等。
四〇歳	伊勢両皇宮。二見の浦。 尾張 熱田。 三河 猿取。峰堂。白峰。 駿州 富士。足柄。雨降。箱海。天木。走湯。江島。 相模 筑波。三。岫。 京州 浅間嶽。駒嶽。 甲斐 御嶽。 信州 南
	宮。 全 鳳凰山。 近江 胆吹。 全 石山。 大和 笠置等。
四五歳	奥州 八栗嶽。背振山。 筑前 彦山。 豊前 高羅。霧島。 日向 足摺。石鎚。 土佐 鹿兒山。 伊予 鹿兒山。憶原。 日向 高千穂嶽。速日嶽。 全 小戸瀬戸。 全 木綿山。 豊前 宇狭山。 全 阿蘇山。 日向 朝

四九歳	蔵山。御笠山。宗像山。表景山。盤国山。厳島。武部山。湯川。黒髪山。弥高山。柗垂山。青山。赤山。八上山。手間山。杵筑社。大山。国山。橘立。大山。大江山。北峰等。
五〇歳	大峰を過ぎて熊野に到る。三栖山。百重山。真形。飽美山。箕面。毗陽山。摩耶。荒山。伊駒山。
五五歳	三熊野山へ行く。玉木に留まり修行する。大日嶽。釈迦嶽。空鉢嶽。七面山。弥山で数月護摩を修す。西向野。吉野に出て大峰の経歴を果たす。
六四歳	愛宕山に遊び精修す。
六四歳	大島に流される。三年富士山に登り、毎夜天木・足柄・走湯を往来する。
小角建造分	
三五歳	笠置山に竹林寺を建てる。
三七歳	吉野寺を建て、この寺に住む。
三八歳	山城国兎道の里に御室渡寺を建てる。冬、海住山を開基する。
四〇歳	葛木の麓に金剛山寺を建てる。
四二歳	胆駒嶽に胆駒寺を建てる。
五三歳	生家に血原寺を建てる。
小角終焉分	
六八歳	葛木。箕面山。熊野。山上。千原寺。箕面葛木の諸山を経て大峰に結び、終に箕面に到る。老母を鉄鉢に載せて隠れる。

以上のように、日本全国にわたって役行者が修行をしたという、つまり関係したという地名を多数あげている。そのほとんどが修験の霊場であることは、明らかであろう。それらの地名の中には、弁才天で有名な、箕面・厳島・背振山・江嶋などの地名もあがっている。⁽²⁶⁾ それにも関わらず、天川の名前が見られないことは、大変不思議と言わざるを得ない。まして、大峰山の間近とも言える場所であ

る。先に述べたように、これ以前に書かれた『修験指南抄』には役行者と天川弁才天の関係が語られているのであるが、それにも関わらず、室町時代末期のこの書には全く書かれておらず、無視されている。このことは、やはり、役行者の伝記類の作者には、役行者が天川弁才天に関わるということ自体、あまり意識されていなかったこ

とを物語っている。

以上のことから判断すると、それよりもさらにさかのぼる十三世紀末の『金峰山秘密伝』において天川弁才天の項に役行者伝承が見られないことは、当時そういった伝承がまだ成立していなかったと解してよいのではないだろうか。このことは、十三世紀末頃の天川においては、役行者を始祖とする修験集団が、まだ力を及ぼしていなかったことを物語ることになる。そのことは即ち、この当時の天川弁才天は、役行者とは関わりの無い全く別な集団によってその信仰が支えられていたという結論に達するのである。

ただし、その集団が修験との関係を全く有していなかったかという点、今のところそれを断定することはできない。というのは、拙稿「竜樹菩薩と修験の山―箕面・愛宕山・背振山の伝承から―」⁽²⁷⁾で述べたように、箕面・愛宕山・背振山においては、役行者を始祖とする修験集団が入ったのは一番最後の段階であって、それに先行する修験集団が複数存在していたと見られるからである。

ところで、ここで問題となってくるのは、十四世紀初頭の『溪風拾葉集』において、役行者が天川で弁才天の法を成就したと述べていたことである。先にも述べたように、これは天川の側から発信されたものと考えられるのである。この時期、天川は役行者とは全く関係のない集団が活動していたはずである。それなのに、なぜ突然このようなことを言い始めたのであろうか。次は、そのところを考えていきたい。

二、『金峰山秘密伝』に見る天川弁才天の信仰

(1) 『金峰山秘密伝』に見る天川弁才天の主張と役行者伝承

それでは、『金峰山秘密伝』において、天川弁才天はどのように語られているのであろうか。「天河弁才天習事」には、次のように記されている。

今此大弁才功德天女者此両部冥会、秘尊悉地、妙体也。是故両部合「一身」定惠撰「一心」也。内証、此第八地薩埵不動地、菩薩也。外用即乾達婆女作「楽歌舞」天女也。現為「災魔」大天、大姉也。即壽命進止、尊故。信者壽命持「万歳」亦成「堅牢」地神、妻女也。^{大黒天也}是福報撰持、天。故婦者七福持「百世」也。是宝部三昧、為「内証」。故此「与福与」^{一作レ}「宜」大將也。既不「二秘仏」妙成就尊故。此「吉野熊野中」為「不二」神体也。故置「熊野吉野両宮中間」此号「吉野熊野宮」也。甚秘思之。是故高祖大師聖筆、当社額題「吉野宮熊野宮」。誠甚秘神也。是以両山信敬、輩悉地若及「遲遲」必参「当宮」。即祈誓願望速成。此「不二」神故求願忽満也。今尊以「四弁」為「本誓」。故我朝日本ト^{イト住}「四処」以表「四弁」徳也。即「一」天河弁才天、法弁才、為「宗」。二「竹生島」弁才天是「義弁才」為「本」。三「江島」弁才天即「河弁才」為「宗」。四「巖島」弁才天此「弁弁才」為「本」。此我国無双、勝地速成悉地、靈所也。此中「天河弁才」即最初本源。^{イナリ}金峰熊野不二、妙体。此「難思、勝地」也矣。

天川弁才天は、「楽歌舞の天女」であり「寿命進止の尊」であり

「福報撰持の天」であるといい、吉野熊野の中で不二の神体であるので、熊野と吉野の両宮の中間に置かれて、吉野熊野宮と呼ばれていると述べている。それ故、高祖大師（弘法大師）が当社の額を書かれているともいう。もし、両宮を信仰する者で、願いの叶うのが遅ければ、当社に参れば願いは速やかに叶うという。そして、弁才天は日本の四カ所に住み四弁の徳を表している。天河弁才天は法の弁才、竹生島弁才天は義の弁才、江島の弁才天は詞の弁才、厳島弁才天は弁の弁才である。この中で、天河弁才天が最初の本源であるという。

つまり、天川弁才天は、歌舞音曲・延命・福德をつかさどる神であることを示すとともに、金峯山と熊野を信仰する人々には、こちらにも参るようにと誘いかけている。さらには、竹生島・江島・厳島といった弁才天信仰で有名な所をあげて、その中の本源であると主張している。

この記述のありようから感じられることは、天川弁才天が自らの靈験が他よりも優れているところを、外に対して強く打ち出そうとしていることである。特に、「吉野熊野宮」という名前を語り、ここに参れば吉野や熊野よりも速やかに願いが成就できるとい言いは、これが吉野や熊野の側から発信されたものとは到底考えられず、天川弁才天が大胆にも唱えだしたものであろう。

この「吉野熊野宮」という主張には、吉野と熊野の信仰を取り込もうとする意図がありありと感じられ、大峰修験者を含む両地への参詣者に対して、天川へも足を向けさせることを期待したものと考

えられるのである。⁽²⁸⁾

その吉野熊野宮の額を書いたのが弘法大師であるという。この伝承に関しては、宮家準先生が、『大峰修験道の研究』の中で、「そこで弘法大師信仰の影響が強いことの理由を考えて見ると、何よりもまず、天川が大和から吉野を通って高野に行く巡礼路に位置していることが注目される。（中略）ともあれ、天川弁才天を弘法大師が祈り出したとの伝承やこの遙拝所の話、さらに数多くの弘法大師にまつわる宝物を伝えているのは、大和から吉野をへて高野詣をする信者を天川に立ち寄らせる必要があつてのことと思われるのである。」と論じられている。つまり、天川弁才天にまつわる弘法大師の伝承を、これを高野山参詣者に向けた天川へのさそいかけとされている。先の吉野や熊野の参詣者に向けた天川へのさそいかけの動きを見るとき、天川弁才天の信仰を広めようとする同じ意図がうかがえるのである。

そうすると、この時期役行者と全く関係のなかった天川が、そこにわざわざ役行者の話を出してきたことも理解できるのである。天川が役行者に関係が深いとすることで、吉野熊野の修験者を天川に引き寄せようとしたものであつたと考えられる。

『溪嵐拾葉集』に「役行者於紀州天川」此法成就。弘法大師即役行者再誕也。」とあるように、役行者と弘法大師の二人が弁才天の法を成就したと述べている。このように、役行者と弘法大師の名前を並記しているところに、両者を全く同じ意図のもとに提示していることは明らかであろう。つまり、両偉人を信仰する人々を取り込も

うとする誘いかけであつたわけである。⁽³⁰⁾

ただし、役行者伝承によつて吉野熊野の修験者を引き寄せようとする試みは、実際のところはあまりうまくはいかなかったようである。というのは、先にも述べたように、室町末期成立の『役行者本記』には全く天川のことを語られていないからである。修験者達にはさほど注目されてはいなかったのであろう。このことは、尋尊が天川弁才天を参詣した際に見た宝物にも現れている。先に「エンノ行者ノ金ツエ」なるものを見たことを述べたが、実はこの時、尋尊は弘法大師にまつわる驚くほど多くの宝物を目にしていたのである。「大師御筆小法花経二部」・「大師御ケサ」・「大師トツコ」・「同造地藏」・「大師御造蔵王」・「当山額大師筆」・「同御造妙音天」・「同御筆仏名尊形」・「大師造愛染王」などである。これらの宝物の存在は、当時の天川弁才天が、高野山参詣者および弘法大師の信仰者をターゲットの中心としていたことを物語るものであろう。つまり、役行者よりも弘法大師の伝承を重視していたのである。それは、その当時の参詣者の求めに呼応したものであつたと考えられる。

(2) 『金峰山秘密伝』に見える天川弁才天の信仰

それでは、いよいよ天川において最も中心となる弁才天そのものの信仰について、『金峰山秘密伝』で語られているところを見ていきたい。巻上の「一尊像習事」に、次のように記されている。

今天女像有三伝。即二臂八臂六臂尊像也。二臂即引琵琶

形。其義如上。次八臂像此甚秘尊。最勝王経説之。此両

部不二究竟秘仏也。(中略)次六臂此五部悉地顕現也。(中

略)亦頂載白蛇。此即宝珠精神七宝頓得本誓也。最極甚深更
可問之。甚秘故略之。亦六臂像在之。又有二十臂像。尋
之矣。

ここには、弁才天の像として三伝があるとして、琵琶を弾く二臂像、最勝王経に説く八臂像、頭頂に白蛇を載せる六臂像をあげ、その他にも六臂像と十臂像を紹介している。

三伝の中で、最後にあげられた六臂の白蛇を頭に載せる像については、宇賀弁才天ではないかと思われる。というのは、一般的には八臂の弁才天で頭頂に老人の顔を持つ蛇を頂く像を宇賀弁才天と称しているからである。その点、ここでは六臂であるところが珍しい。

同書の巻下には「大弁才功德天法。」

吉野 天河
此名吉野熊野宮法。

の記事があ

り、この「大弁才功德天法」という修法は、「天河の吉野熊野宮法」と名付けられているように、天川弁才天において行われていた修法であることがわかる。その「道場観。」如来拳印には、次のようにある。

観想。(中略)此即海中竜宮、宝珠竝精進。峰、宝珠、冥会不二

故此宝珠变成大弁才天女。身白肉色。頂上載白蛇。其頭

老翁。八臂具足。右、第一手執劍。第二手執宝棒。

第三手持箭。第四手持輪。左、第一手持宝珠。第二手

持三戟鉞。第三手執弓。第四手持鎗。放光明照国土。

雨無量珍宝令充足行者所願。十五童子檀毗利須達大黒

天神四大天王并熊野權現吉野蔵王部類諸神前後圍繞。七處
加持。(

後略)

これは修法の際の「観想」ではあるが、弁才天女の頭上に白蛇を

のせ、その頭が老人となっていて、八臂にそれぞれ決められた物を持つ、まさしく宇賀弁才天の像容をそのままに記しているのである。

この時期の天川に実際に八臂の宇賀弁才天の像があったのかどうかは不明ではあるが、この修法を大々的に打ち出しているところを見れば、これ以後八臂の宇賀弁才天の像が主流となっていたのではないかと想像される。現に、『天川』⁽³¹⁾には、天河大弁財天社蔵の天川弁才天御尊像（八臂宇賀弁才天座像と十五童子）の写真が掲載されている。

以上のことから、天川弁才天では、『金峰山秘密伝』が書かれた十三世紀末には、その当時様々な弁才天の信仰がある中で、宇賀弁才天の信仰が主流を占めるようになっていたのではないかと考えられる。

宇賀弁才天については、山本ひろ子氏が、『異神——中世日本の秘教的世界』⁽³²⁾の中で、「戒家を担い手とする叡山の宇賀神信仰は、謙忠に象徴される十三世紀中葉を最初の隆盛期とすると、それから七、八十年後の光宗、運海の活躍した十四世紀中葉から後半あたりを第二の開花期としてよいだろう。なお、光宗に先立つ興円の時代（十三世紀後半〜十四世紀初頭）には、戒家の教説の成熟と相俟って天部における顕密一致説が提唱された時期と考えられる。」と論じられている。

これによると、宇賀弁才天の最初の隆盛期は十三世紀の中葉ということであるから、『金峰山秘密伝』が撰修されたと考えられる十三世紀末に、天川弁才天が宇賀弁才天を中心に据えてその信仰を広め

ようとしている姿は、時期としてまさに当てはまるわけである。

それでは、宇賀弁才天の信仰とは一体どのようなものであったのかというと、『溪嵐拾葉集』巻第三十六「弁財天法秘決」に、「以宇賀弁才^ヲ為「福德^ト尊^ト也^ト」とか「宇賀弁財主^ヲ「福德^ト」とあるように、主として福德を願うものであった。そのことは、天川弁才天においてもそのまま踏襲されており、先に紹介した『金峰山秘密伝』「天河弁才天習事」において、「楽歌舞の天女」であり「寿命進止の尊」であり「福報摂持の天」であると述べた後に「故帰^ル者^ハ七福持^ニ百世^ニ也^ト」と主張しているところに現れている。



天河大弁財天社

三、天川弁才天信仰の広まり

十三世紀末頃、天川弁才天は、それまでにあったいくつかの弁才天信仰から、新たに登場した宇賀弁才天の信仰を中心に据えて活動を始めたものと考えられ、そのことから、一躍その信仰が隆盛になったようである。その一つの現れが箸尾満嶋弁財天であり、もう一つが浄瑠璃寺の弁財天である。

(1) 箸尾満嶋弁財天

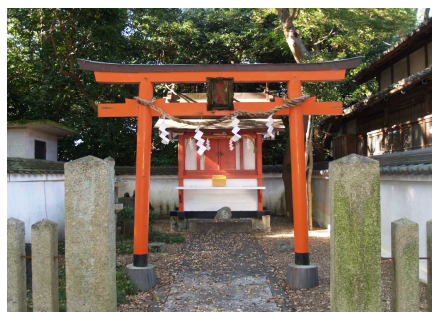
奈良県北葛城郡広陵町弁財天に、櫛玉比女命神社がある。延喜式式内社という由緒ある神社であるが、いつの頃からか大福寺の鎮守社として、明治以前は箸尾満嶋弁財天社の名で知られていた。この社の由来については、大福寺が所蔵している応長二年（一二三三）『箸尾満嶋弁財天瑞夢記』⁽³³⁾にくわしく記されている。

その「一 弁財天社壇造立塚由来事」では、聖徳太子がこの地の小塚に宇賀神将を祀っていたという。そして、「二 大禪上人拝殿造立事」では、大禪上人が天女の夢告によつて、弘安七年（一二八四）箸尾弁才天の拝殿の造立を果たしたことを述べている。ここでは、箸尾の弁才天が吉野の奥からやつてきた弁才天であるとしている。さらに、「四 浄戒房同弁才天社壇造替事」には、正安元年（一二九九）の春のこと、信貴山と長谷寺の修復の勸進を志した浄戒房という僧が、そのためにまず天川弁才天へ詣でて所願成就の旨を祈請した。そして、その帰り道に当社の聖と出会った。

聖は当社の建立の不思議なりし由来を、くはしく云ひて共に隨喜の涙をながし侍りて寝たる夜の夢に、浄戒房の枕に天女現給ひて示して云う。我れ庶度衆生の為に吉野の奥よりはるばると来れりと云へども、宝殿せばくして参詣の人其信うすぎにたり。汝宝殿を造り改めて我願を成就せしむべしと告げ給ふ間、浄戒房も先の示現と云ひ、今の夢想と云ひいよいよ信心をおこして勸進しければ、是を聞きて親疎遠近の貴賤上下、米銭のたぐひをおしまず、寄りて土木のいとなみをはげむ間、程なく社殿も造立してけり。其の後奥の弁才天の道にて、小童の手より得るところの玉をも当社に納め奉る。此玉は則ち宝珠也。天女は是宇賀福天におはします。宝珠は又萬宝出生の基ひなり。されば一度も当社に歩を運ぶ人は、貧乏の憂いなく、刹那も天女に信を至さん輩は現当の徳用（用ひて利益多きこと）にほこるべき者也。

以上のように、箸尾弁才天は天川弁才天がこの地にやつて来たという伝承を有している。大禪上人による拝殿の造立が弘安七年（一二八四）のことであり、浄戒上人による社殿の造り替えが正安元年（一二九九）のことであるという。これが正しければ、天川弁才天が宇賀弁才天としてその信仰を広めようとしていた十三世紀末のまさにその時期に合致していることになる。しかも、「天女は是宇賀福天におはします」とあるように、宇賀弁才天であったことは間違いないであろう。櫛玉比女命神社で現在祀られている尊像を実際に拝観させていただくことができたが、それも老人の顔を持つ蛇を頭の

上にのせた八臂の立像で、まわりに十五童子を配する姿であった。⁽³⁴⁾
また、櫛玉比女命神社蔵の古い木版画像も宇賀弁才天立像となつて
いる。また、大福寺でも同じお姿であるとのことであつた。⁽³⁵⁾



櫛玉比女命神社の弁才天



大福寺の弁才天

(2) 浄瑠璃寺の弁才天

また、同じくこの時期に天川弁才天を勧請しているのが、京都府
木津川市加茂町の浄瑠璃寺である。『浄瑠璃寺流記事』⁽³⁶⁾は、年代を追
つて浄瑠璃寺の来歴をくわしく記録しているが、その「一弁財天勧
請事」の項に、次のように記している。

永仁四年^{丙午}六月二十一日^{刻奉} 勧請先社瑞籬内^{イカサ} 移殿^{イカサ} 構て奉居。
同年七月九日御沙汰地引^{マ、西峰之氣} 同十一日御殿造功成了。同月奉^{迎院願}
入之了。南都幸徳院陰陽師沙汰也。彼人之許に。吉野奥^{天川} 奉^{より}
勸請之。依有子細^{子細} 当寺へ奉渡^渡之者也。

これによると、浄瑠璃寺の弁才天は永仁四年（一二九六）に勧請

されたもので、元々は奈良の陰陽師幸徳井が天川より勧請したもの
であつたという。このように、浄
瑠璃寺の弁才天についても、十三
世紀末に天川弁才天より勧請され
ていることが明らかである。そし
て、『真言律宗 小田原山 浄瑠璃
寺』⁽³⁷⁾には、八臂坐像で老人の顔を
持つ蛇を頭上に頂く弁才天像の写
真が掲載されているので、これも
間違いなく宇賀弁才天である。⁽³⁸⁾



浄瑠璃寺の弁才天

おわりに

天川弁才天は、大峰山系に位置しているため、修験との関わりが
密接であつたと考えられている。確かに、天川の人々は、小篠や弥
山の宿の管理をまかされたりするなど、大きな役割を果たしてきた。⁽³⁹⁾
そのため、弁才天の信仰においても、修験との関係で説かれること
が多かつた。

しかし、本論で述べてきたように、役行者にまつわる伝承が『金
峰山秘密伝』が成立した十三世紀末には見られず、その後になつて
作られたものであることから、少なくとも役行者を始祖とする修験
集団の影響を受ける以前から、天川においては弁才天の信仰を支え
てきた独自の集団が存在していたことは明らかであろう。ただし、

彼らがまた別の修験集団である可能性は残されているのではあるが。

彼らは、天川弁才天を「吉野熊野宮」と主張することで、大峰修験者を含む吉野・熊野への参詣者に対して、その足を天川にも向けさせるよう働きかけるようになった。そして、その一環として、天川は役行者が深く関わった土地であるとの言説を唱えるようにもなった。また、一方で、それよりも早くかと思われるが、弘法大師が天川と深く関わっていたとする言説を唱えるようになり、そのことにより、高野山への参詣者もこれまた天川へ立ち寄らせるように働きかけたのである。その結果については、役行者伝承のほうはあまり効果をあげたとは言えなかったようであるが、弘法大師の伝承のほうは大いに参詣者を引きつけたようである。⁽⁴⁰⁾

天川には、妙音天を含む弁才天の様々な像容が見られることから、様々な信仰があつたものと思われる。十三世紀末、その中に宇賀弁才天の信仰を強調し、それを中心に据えて、天川弁才天の信仰を広げていこうとする動きが起こつてきた。それが、『金峰山秘密伝』の記述である。

その動きは成功を収め、同時期の箸尾弁才天や浄瑠璃寺の弁才天などに見られるような勧請となつて現れている。天川弁才天の信仰の広まりは、それはすなわち宇賀弁才天の信仰の広まりでもあつたと言ふことができるであろう。その後、南北朝時代を経た後、興福寺の僧による盛んな天川詣でへとつながっていくことになる。

ところで、そもそも天川において弁才天の信仰を支えていた集団が、一体どのような人々であつたのか、また、そこへ宇賀弁才天の

信仰がどのように導入されたのかなど、定かでないところが多く残っている。それと、後に天川と修験（役行者を始祖とする集団）との関係が深まっていたようであるが、一体どのようなにしてそれができあがつたのかについてもまだよくわからない。今後さらに考えていきたい。

〔註〕

(1) 『大和名所記』（臨川書店、一九九〇年）。内題『和州旧跡幽考』。

(2) たとえば、宮本常一氏は『吉野西奥民俗採訪録』（『宮本常一著作集』三四、未来社、一九八九年）において、「（天川村の）東部の諸村は、修験道場としての山上岳登山者のための先達たるものが多く、いわゆる山伏村であつたようだ」と述べられている。

(3) 『金峰山秘密伝』（日本大蔵経第九十三巻）。解題には、「本書の成立年代は中巻奥書には、延元二年二月十五日、下巻には延元二年七月と記されている。ただしこれは法務僧正が撰上した年代で、撰修年代はこれよりさかのぼると考えられるが、正確な年代は知りたい。わずかに中巻に記載されている山上蔵王堂の弘長三年（一二六三）、文永五年（一二六八）の両度の炎上が、本文記載記事の下限であることから十三世紀末に撰修されたと推測することができよう。」とされている。ほかに、佐藤虎雄氏の「金峰山秘密伝の研究」（『天理大学学報』一七巻一号、

一九六六年一月）がある。

- (4) 宮家準著『大峰修験道の研究』（佼成出版社、一九八八年）

「第五章 大峰山の行所と修行」「第二節 天川弁才天と弥山の伝承」「一 天河弁財天社」の項。

- (5) 史料では、

與福神印。^{無神} 未敷蓮花印。 宝珠印。 真言印。

（梵字……）

依「此印言」故一切財宝隨願速成就

となっている。もしかすると、出典が異なっているのかもしれないが、内容からすると、與福神印と考える方が意味が通りやすいように思う。

- (6) 鈴木昭英著『修験教団の形成と展開』（法蔵館、二〇〇三年）

「Ⅲ 修験道靈山と山麓集落の生活」「大峯修験道と天川村」

「二 大峯修験道と天川郷」「(1) 金峯山信仰の成立」の項。

- (7) 「(3) 本・当両山方の大峯入峰と天川郷」の中で、峰中作法

次第等をあげて、「しかし、ここには洞川や坪ノ内の社寺・靈窟・行所に参詣、修行したことは窺われない。入峰の際立ち寄ったことは間違いなからうが、峰中の作法次第であるから、これの記載は省略したのであらう。」とされている。そして、聖護院門跡の雄仁親王の天保十年（一八三九）八月の入峰の記事を紹介されている。確かに洞川竜泉寺と天川弁才天社への参詣が見られるが、幕末のことなので年代が大きく異なっている。

- (8) 『日本靈異記』上巻の「孔雀王の咒法を修持し、異しき験力

得、もちて現に仙となりて天に飛ぶ縁第二十八」に、鬼神に對して「大倭の国の金の峯と葛木の峯とに一つの椅を度し通はせ」と命じている。

- (9) 角川文庫『今昔物語集』（角川書店、一九八四年）。

(10) 『英俊御聞書』（東大寺図書館蔵）。『天川』（駿々堂、一九七六年）の永島福太郎「天川の歴史」「四 天河弁才天信仰」の項に翻刻されているが、影印本を見したところ、一部漏れかと思われるところがあつたので、（ ）書きで挿入した。

- (11) 『溪嵐拾葉集』（大正新修大蔵經第七十六卷統諸宗部七）。

(12) これとほぼ同じ文章が、竹生島弁才天の項の後にも載せられており、次のようである。

相伝云。役行者於「紀州天川」此法成就。弘法大師即役行者再誕也。仍大師同此天川此法成就。又一守長者同於此所成就云云。又云。蒲生野的長者於「江州竹生島」此法成就。的長者須達再誕也。即伝教大師大檀那也。一守長者檀毘梨再誕也。即弘法大師大檀那也

ここでは、一守長者も天川でこの法を成就したとしている。なお、本文史料の「何大師」の部分は、こちらの「仍大師」の方が意味が通りやすい。

- (13) 『修験指南抄』（『神道大系』一〇三、論説編十六、修験道）。

- (14) 『峰中秘伝』（日本大蔵經第九十三卷）。

- (15) 『役君微業録』（日本大蔵經第九十六卷）。

- (16) このほかに、天川弁才天の名が登場するものとして、『役行者

講法則』と『修驗最勝慧印三昧耶法玄深口決』があるが、役行者との関わりは特に言わない。

- (17) 『修驗指南抄』については、解題で、「室町末、永正の頃（一五〇四—一五二一）に出たとみられる『両峯問答秘鈔』下巻には、二、三か所にわたり本書が引用されているが、引用の内容が必ずしもすべて聖護院本に見出されないのは、本書が原本を多少省略した本であることを示すのであろうか。著者は未詳。その成立は室町初期と推定される。」とあり、室町初期の理由は特に書かれていない。役行者の箕面での話を見ると、その記述は『箕面寺秘密縁起』を引用したのではないかと考えられるほどよく似ている。『箕面寺秘密縁起』の成立もよくわかっていないが、本書の成立時期についてはやや疑問が感じられる。

- (18) 『私聚百因縁集』（大日本仏教全書第一四八冊）。

- (19) 日本古典文学大系八五『沙石集』（岩波書店、一九六六年）巻第一（三）「出離ヲ神明ニ祈^{いの}事」。

- (20) 日本古典文学大系三六『太平記』三（岩波書店、一九七九年）巻二十六「芳野炎上事」。

- (21) 『三国伝記』（大日本仏教全書第一四八冊）。

- (22) 『塵添壻囊抄』（大日本仏教全書第一五〇冊）巻第十三【廿

六】「吉野蔵王事」。

- (23) 『両峰問答秘鈔』（日本大蔵経第九十五巻）。

- (24) 『役行者本記』（日本大蔵経第九十六巻）。

- (25) 『役君形生記』（日本大蔵経第九十六巻）。

- (26) ただし、この中に弁才天であれば当然あがつてこななければならないのは竹生島の名前がないことも不思議である。その理由も考えてみる必要がある。

- (27) 「竜樹菩薩と修驗の山―箕面・愛宕山・背振山の伝承から―」（『御影史学論集』四〇、御影史学研究会、二〇一五年）。

- (28) 今年の第四七回日本民俗学会年会において、この拙論を発表したところ、小田匡保先生より、『金峯山秘密伝』よりも成立が古いとされる『諸山縁起』に大峰の宿名として「吉野熊野の宿」というのが出ている、との貴重なご指摘をいただいた。確かに、「吉野熊野」という言い方が他にもあることは、その名称を借りて「吉野熊野宮」と称した可能性も考えられ、今後の課題としたい。ともかく、ここでは、「吉野熊野宮」という言い方によって、両山の信者の信仰を取り込もうとしている姿に注目したい。

- (29) 前掲註(4)、同項目。

- (30) これよりも早い時期の『金峰山秘密伝』には、弘法大師の名前のみが見られることから、弘法大師の伝承の方が先に語られるようになっていたものと思われる。

- (31) 前掲註(10)、口絵写真。

- (32) 山本ひろ子著『異神―中世日本の秘教的世界』（平凡社、一九九八年）「第三章 宇賀神―異貌の弁才天女」・「III 弁才天灌頂―戒家相承の弁才天と如意宝珠をめぐって」の項。

- (33) 『箸尾満嶋弁財天瑞夢記』（箸尾満嶋弁才天顕彰会、一九七九

年)。

(34) 『広陵町の仏像』(広陵町教育委員会、一九九二年)に、写真が掲載されている。櫛玉比女命神社の宮司さんのお話では、明治の廃仏毀釈の時、弁天さんの像がこわされる危険があったので、村の総代さんが自分の家の蔵に隠されていたという。その後、明治の中頃になつて許されることになつたので、今のよう
に摂社としてお祀りするようになったということである。六月
第一日曜日と十一月第一日曜日がお祭りの日で、地区の総代の
方がお祀りされている。十年ほど前までは、御所^{ミヤ}や天川の方が
お詣りに来られていた。最近では、地元の方でも弁天さんのこ
とをよくご存知ない方が多くなつていふとのことである。

(35) 大福寺のご住職さんのお話では、先代の老師さんが、やはり
大福寺で弁天さんをお祀りしたいと思われて、有名な仏師の方
から教えを受けてご自身で弁天さんを板に線刻・截金されたとい
うことである。その図像のもとにしたのが、ある時は掛け軸
のようなことを言われていたという(前掲『広陵町の仏像』に
大福寺伝存の弁財天十五童子画像のことが記載されているので、
これをもとにされたのではないかと思われる)。現在、山門を入
った所に「満嶋弁財天」としてお祀りされている。祭日は海の日
で、行者さんに来ていただいて柴燈護摩をされているとのこ
とである。お詣りをされる方のお願ひ事はそれぞれで、ある時
は、笛を吹く方やホラ貝を吹く方がお詣りされていたという。
広陵町は、織物などの工場があつたので、その方もお詣りさ

れていたということである。また、古くからこの町に住んでお
られるお家の方から、「御坊さんの市がたつようになつたのは新
しいことで、それよりも前に大福寺の弁天さんの市がたつてい
た。」というお話を聞かれたことがあるという、興味深いお話を
うかがうことができた。御坊さん(教行寺箸尾御坊)の報恩講
の市も、今では見たことがある人も少なくなつていふとい
うほど以前のことで、それよりもつと前のこととなると、幕
末の頃の話かと想像される。

(36) 『浄瑠璃寺流記事』(『大日本仏教全書』第一一九冊、寺社叢
書第三)。

(37) 『真言律宗 小田原山 浄瑠璃寺』(浄瑠璃寺、二〇一四年)。

(38) 浄瑠璃寺の副住職さんのお話では、勸請当時からのものでお
姿は八臂で頭に蛇を載せておられるとのことである。以前は池
の中の島に祀られていたが、傷みが出てきたので今は庫裏に祀
られているそうである。池の方には代わりの弁才天をお祀りさ
れていて、七月十四日の祇園サンには、地元の方が来られてお
祀りをされている。風雨が順調で作物がよく実るようにとのお
祀りである。弁才天は普段は秘仏で、一月の八日から十日にか
けての三日間だけ公開されているとのことである。

(39) 鈴木昭英先生は、前掲註(2)『修験教団の形成と展開』Ⅲ 修
験道霊山と山麓集落の生活「大峯修験道と天川村」の中で、
「峰中宿のうち、天川郷と関わりが特に深いのは小篠宿と弥山
宿であつた。小篠宿の警固村は洞川、弥山宿のそれは天川社家

と古来より決まっていた」と述べられている。

(40) 『天川村民俗資料緊急調査報告書 第二』(奈良県教育委員会、一九七六年)には、「行者(山上参り)と山上道」の項に次のようにある。

広瀬(天川弁才天から高野山方面に行った所…筆者註)の上出の花谷慶治(明治三十九年生まれ)家は在所の一番高みにある。子供の頃、朝から下を通る行者の数をヨンで(数えて)見たことがある。七百五十人ぐらいまで数えて、面倒臭くなって止めてしまったが、あの分では多分夕方までに千人以上通ったろうという。(中略)行者の流れはおもに山上ヶ岳から高野に向かって動いた。

明治時代の話であるので、これをそのまま中世に当てはめることはできないが、両地を巡る絶好の地点に天川弁才天があったことがよくわかる話である。

【付記】本稿作成にあたっては、奈良県広陵町の櫛玉比女命神社の宮司さんご夫妻、同町大福寺のご住職さん、ならびに京都府木津川市浄瑠璃寺の副住職さんの皆様方に、お忙しい中をくわしくお教えいただくことができました。心より御礼申し上げます。

また、小田匡保先生には、日本民俗学会年会発表の際にご意見をたまわり、問題点を教えていただくことができました。そして、いつもながら、田中久夫先生をはじめ御影史学研究会の皆様には、懇切丁寧にご教示をいただくことができました。ことに、代表理事の

酒向伸行先生には何度も査読をお願いし、その都度適切なご助言をいただくことができました。あわせて感謝申し上げます。



岩田書院 新刊ニュース No. 885 2014. 10.

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4-25-6-103 ☎03-3326-3757 FAX 03-3326-6788

御影史学研究会(代表理事：酒向伸行)編

田中久夫 歴史民俗学論集 全5巻 (最終回配本)

第5巻 陰陽師と俗信 解説：藪 元 晶

2014年10月刊・A5判・446頁・上製本・函入・13800円(税別)

田中久夫氏(御影史学研究会名誉代表理事・神戸女子大学名誉教授/1934年生)の業績を全5巻に編集。各巻に解説を付す。本巻には、新稿(*)を含む以下の13論文を収録。

【主要目次】

ISBN978-4-87294-879-0 C3339

第一章 陰陽師と天体観測

第一節 備前・備中の陰陽師の占める位置—奈良・平安朝初期を中心に—

第二節 播磨と陰陽師

第三節 平安時代の天体観測に関する覚書

第四節 安倍泰親・泰茂父子と安倍時晴の天体観測のこと—『玉葉』の中から—

第五節 慶滋保胤と佐保の神と住吉の神—杣山の建築用材輸送をめぐる問題—

第二章 藤原氏と俗信

第一節 藤原氏の神と鹿

第二節 柿の俗信覚書—幸不幸の両面を持つ柿—

第三節 柿の民俗と藤原氏—興福寺の柿から庭の梢の柿へ— *

第四節 栗節供と関白大饗の甘栗使 *

第三章 神の乗り物

第一節 牛の民俗

第二節 牛に乗るということ

第三節 雷の通る道

第四節 鯉に乗る神覚書

【田中久夫 歴史民俗学論集●既刊】

①皇后・女帝と神仏 8900円(税別)

②海の豪族と湊と 9500円(税別)

③山の信仰 9500円(税別)

④生死の民俗と怨霊 11800円(税別) 全5巻：揃53500円(税別)

注文方法 A 書店経由の場合：「地方・小出版流通センター」取扱品と言ってご注文ください。

B 直接小社に申込みの場合：①先払い(消費税を加算してご送金ください。郵便振替口座：00100-2-564137)。②代引き(配達のドライバーにお支払いください)。③後払い。

送料：①無料。②③定価合計8000円以上は無料、8000円未満は250円、1500円未満は500円。

<http://www.iwata-shoin.co.jp> 刊行物内容/地方史研究雑誌DB/新刊ニュース裏だより/学会情報 他